自由人の舌打ち

vol.53

求愛としての詩

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

生物の世界では種によって独自の求愛の方法が磨き上げられてきた。たとえば、孔雀の場合、オスは豪華な尾羽を雌にアピールする。イッカクやセイウチの場合は、立派な牙でアピールし、ナイチンゲールは華麗な鳴き声で歌うとメスが交尾し易くなる。求愛ダンスを磨き上げる鳥もいる。こと求愛活動に関わる特質は極めてスピーディーに進化する。人間の場合は求愛にコトバを使い始めた時に飛躍的進化が生じた。

最初はかなり素朴なやり方で求愛のコトバを用いていただろうが、相手の心を打つ、その気にさせる方法を模索するうちに、詩的な洗練が加えられていった。その過程で、人間の知性も鍛えられていったと思われる。やがて、求愛の目的を逸脱し、コトバの技巧を凝らすことに夢中になるものも現れ、また時代や地域に特徴的な独自の表現が編み出されたりして、それなりの呪力や影響力を持つ詩や歌が生み出され、それを模倣する者などが現れ、現代のヒットソングと同じように流行現象になったりもしただろう。

『源氏物語』では男女間で熱心な歌の応酬が行われていた。男が女に歌を送ると、女が謎めいた返しの歌を送り、互いの心理を探り合う言語遊戯が続けられた。それが宮廷の恋愛のスタイルとなり、五七の韻律と諸々の約束事に基づいた定型が守られてきた。しかし、明治以降の日本の近代詩は、定型と求愛の要素を一度排除してしまった。それでも西洋音楽の受容を経て、日本語と西洋音階との結びつきを図り、「赤とんぼ」などの歌曲を作り、その延長上で歌謡曲、J-POPなどが発展し、新たな恋愛詩の流れを生み出したのだった。いわば、難解で呪文的な現代詩とは別に、音楽ジャンルで恋愛詩は復活したのである。母音が五つで、西洋の諸言語よりも単純な音節の日本語は、韻を踏んでも、駄洒落のようになってしまうが、それをなんとか克服し、シンプルだが、心に染みる歌が量産された。今は巧みに和歌を詠んでも、求愛に有利に働くわけではないが、軽音楽の担い手たちはしっかりと求愛に有利なポジションを占めている。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授